

■四月九日放送

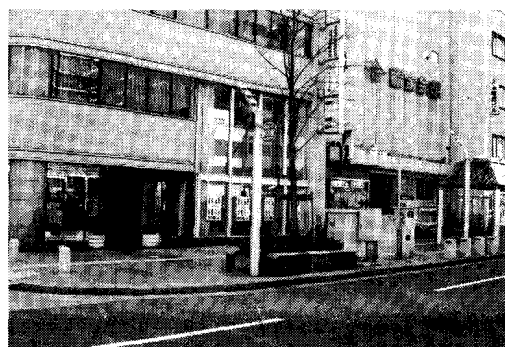
# 明治・福井のへまちおこし

福井商工会議所・商工相談所  
所長 奥山秀範



明治四年七月、維新政府は廃藩置県を断行すると、その四ヶ月後にはさらに整理統合に着手し、若狭三郡と越前の敦賀等二郡で敦賀県を、越前の残り五郡で福井県を置いたが、旧福井藩の影響を嫌う政府は、直後に福井県の名を足羽県に改めた。しかし、これにとどまらず、明治八年一月足羽県を解体し敦賀県に吸収するとともに、県庁を敦賀に置き、旧福井藩出身の足羽県役人は一部を除き一掃された。旧足羽県関係者の反発は大きかったが、さらに、旧福井藩士が驚愕するような事態が待っていたのである。維新政府は、全国府県のさらなる統廃合を断行して、敦賀県を解体し、嶺北を石川県に嶺南を滋賀県に分属させたのである。福井人にとって、それは自己のアイデンティティの喪失ともいべき事態であつたといえる。

明治前期に経済界をリードした伊藤貞、明治中期以降のリーダーであつた石田磊、二人はともに下級武士の出身であつたが、幕末から廃藩置県を経て、足羽県、敦賀県、石川県と統廃合繰り返す行政のなかで、官吏をつとめながら福井の殖産振興に務めていた。特に、伊藤貞は藩政時代か



写真は第九十二国立銀行、福井商工会議所が置かれた佐久良中町110番地（現中央3丁目）

ら物産総会所につとめ、廃藩後も官吏として、この任にあたり、敦賀県時代には勸業掛として酒井功から織機の伝習生派遣の建議を受けて細井順子らの京都派遣に尽力し、また染色技術の重要性を指摘し村野文次郎を同じく京都に派遣するなど、その果たした役割は大きいものがあつた。

越前の石川県への統合に際して、伊藤は石田ともに転籍したが、このままでは福井の衰退は免れないと考え、伊藤をして官吏辞職に踏み切らせた（石田は残留）。

民間人となつた伊藤は士族団のリーダーである千本久信や本多鼎介の支援を得ながら、産業振興に欠かせない銀行（第九十二国立銀行）や、商法会議所を創設し、また福井のアイデンティティ確立のため福井新聞（第一次）を創刊するなど、福井の「まちおこし」を推進し、明治中期に後事を石田磊に託すまで、福井の基盤確立に努めるのである。

講師略歴：奥山秀範（おぐやま・ひょうのり）

昭和二十七年一月丹生郡越前町生まれ。昭和四十九年立命館大学産業社会学部卒業、昭和四十九年福井商工会議所入所、商工相談所にて中小企業の経営相談、情報化支援に従事。金融課長、総務課長、総合企画室次長を経て平成十年四月より現職。